

大宮見沼

よみさんぽ

第24号

特集
市民参加のまちづくり

やどかりの里発！ 地域発見マガジン 写真家 野口勝宏



特集

市民参加のまちづくり

安部 邦昭さん

(ポタジェ～食べる通信 from 埼玉～編集長)

今回登場する安部邦昭さんとの出会いは2015（平成27）年秋、多彩な活動が印刷された名刺を拝見し、何が本業なのだろうと疑問を抱いたものです。やがて2016（平成28）年7月には、埼玉県内の農業の現状を見据えた「ポタジェ～食べる通信 from 埼玉～」(以下、ポタジェ) 発行という新しい活動を始めました。今回は、安部さんの多様な活動にける思いをお聞きました。

安部さんと言えばビオトープ

大宮に生まれた安部さんが最初に“みどり”を意識したのは、見沼たんぼがきっかけだったと幼い頃を振り返ります。当時公民館で開かれていた学習会で、見沼たんぼの話がされている傍ら遊んでいた記憶があるそうです。

やがて飯能にある自由の森学園へ進学、時代はバブル経済に浮かれ、埼玉県も例外なく開発の波にさらされました。八高線沿線の丘陵地が削られ谷を埋めゴルフ場や住宅地に変貌していく様子を目の当たりにし、まちづくりの計画はこれでよいのか、なぜ地元は容認するのか、多感な高校生は開発反対の運動を起しました。しかし地元は村社会、開発派の村の長^{おさ}的な人の言いなりで、住民は反対意見を言う状況ではありませ

ませんでした。この経験は、まちづくりの計画は「反対」と声高に言うだけでなく、立場が異なっても自分たちの問題として地域から動くこと、考えることが大切であり、そのためのアプローチとして必要なことは何だろうと少し引いた眼で考えるきっかけとなったそうです。



「ポタジェ」を手にする安部さん

一方、ドイツ人と日本人のハーフである理科の教師から「biotop（ビオトープ）」という言葉を知ります。ドイツ発祥の考え方でビオは命、トープは空間を意味し、野生生物の生息空間と訳されます。また埼玉県野鳥の会が編んだ「ビオトープ緑の都市革命」（ぎょうせい、1990）という本を読み、その思想に感動した安部さんは、高校卒業前に学校の庭に教師や友人とビオトープを造ったのです。この時に造ったビオトープは、20年以上経った今は木も大きく育ち発展を続けているそうです。「自然やみどりをまちに取り戻すことは昔から僕の大テーマでした」と安部さん。

大学では林学を、アメリカの大学院では景観生態学を学びました。帰国後に勤めたコンサルティング会社では、景観の諸特性をつくる生態ネットワークの解析や、開発の恐れがある場所と生きものの眼で見たふさわしい生息地を科学的・客観的分析する方法、住民参加の生きもの調査の手法などを研究しました。

みどり・環境からのまちづくりの実践

その後はいくつかの非営利団体に属し、自然環境の保全や環境学習に取り組みました。まちづくりのワークショップを企画運営する時は、市民が地域のことを一人称で考え、地元の課題として責任をもち関わるきっかけは“みどり”や自然が切り口になるという揺るがぬ視点をもち続けました。さいたま市環境会議やさいたま百景選定市民委員会の活動もみどりあるまちづくりへの思いに通じるものです。

安部さんの実践の場として、まずさいたま市桜環境センターのビオトープがあげられます。ここでは地域を代表する野生の生きものを近くで観察でき、人と生きものの共生について学ぶことができます。

また、「こうぬま・水と緑を楽しむ会」の活動初期に参加し、鴻沼川・高沼用水地域のまちづくりを実践し、用水から地域づくりを考えることに大きな成果を残しました。約300年の歴史がありコンクリートで護岸されていない高沼用水は市民らが補修作業を行うことで、草花が茂りシジミが採れる自然豊かな環境になっているそうです。会の象徴的活動である新幹線高架脇の環境空間にある「河童の森」は地元の住民・自治会・企業などがともにつくり守り、すべての生きものにとって美しい森として次世代に受け継がれています。

さらに、さいたま市西区水判土の「鴨川みずべの里」の公園づくりでは、地元



市民活動が実を結んだ活動拠点「河童の森」

市民としてグループで“この周辺にない原っぱがあり生きものいる公園”を提案し、この動きはさいたま市で初めて本格的な市民参加で公園づくりを行う事例となりました。モデルガーデンとして何区画か一般公募するなど、環境に関心の高い市民が生活の中に公園のある意味を継続して考えられるよう取り組んだそうです。

広がる活動

一方まちづくりの「少しライトな入り口」と安部さんが話すのが「大宮ぷろでゅ〜す」の活動です。大宮は氷川神社もあり鉄道のまちと呼ばれますが、何か面白いものがあるか問われたときにぱっと応えられないのは残念だと考えて、「038手ぬぐい」や38cmのホットドッグ「038Dog」などを商品開発し、大宮をアピールしていこうと、楽しく進めているそうです。

一方、地域を知るためのインターネットメディア「大宮経済新聞」の創刊や、今評判のコワーキングスペースを大宮駅近に開設することに協力し、市民が交わる場づくり等、大宮のまちの経済やビジネスを活性化し、生き生きとした暮らしを生み出す活動にも携わっています。

「ポタジェ～食べる通信 from 埼玉～」の活動へ

まちづくりを仕掛けていく中で、都市近郊の農業の現状について大きな課題を感じるようになります。農地は自然環境として大切だけれど、就農者の高齢化により10年後は荒地になることは想像できました。そしてつくられた素晴らしい作物とその生産者の思いを知るにつけ、まちづくりや環境に興味のない人でも「食」が入り口ならば自分の問題として農地として維持することの意味や環境を考えることができるのではないか、こう思うようになり、その回答が「食べる通信」にありました。

「食べる通信」は2013(平成25)年震災で大きな被害を受けた東北から生まれ、全国37地域へと広がりました。食べもの付き情報誌と言えばイメージがつき

やすいかもしれません。大きな流通システムで分断された、生産者と消費者をつなげようとするものです。「『ポタジェ』とはフランス語で『見て美しく食べて美味しい庭』という意味があり、埼玉の生産地はまさにポタジェだったので。農業だけでなく畜産など都市型生産現場の未来を開くために、読者は食べることで応援してくれないか、そして『食べる人』にとって食べものを『つくる』は他人事ではなく自分事に、地元のこととして『つくる』ことを愛して欲しいと願っています」と安部さんは語ります。

ポタジェでは、地元レストランのシェフらによる特集の作物を使ったレシピが欠かさず掲載されるので、ポタジェの箱が届いたら、生産者のつくるに込めた物語に胸を熱くし、レシピを読み私ならではの料理方法を考え、そして作り食べる、一連の流れが生まれるのです。

ポタジェの活動を支えるのは読者数、季刊で年4回発行していますが、食材の収穫期に合わせて前後することがあり、この収穫量も天候に大きく左右されるため、苦労はたえないとのこと。地域の農を消費者である私たちも農家とともに支える新しい関係性づくりの果実は、まだ少し先にあるのかもしれませんが。

これからも手をかけまちをつくる

「私は自分の子どもたちやみんなが気持ちよく希望をもって生きることができる世の中にしたいと願っているのです。自然が近くにあるのは気持ちよい暮らしの1つかな。地域にいろいろ体験できる場があり、そこは互いの価値観を認め合える場であって欲しいし、そんな地域や社会をつくるには市民活動は欠かせないと思っています」と先を見据えて話してくれました。そして、「ビオトープでは動植物は自然に放置したから育つのではなく、環境を用意し、整えることで本来の姿を回復するのです。山里の雑木林も下草刈りをすることで生物の多様性を育みます。手をかけることが必要なのです。まちづくりも同じだと思います。手をかけることで子どもたちが暮らしていく世の中は変わると信じています」と、自然と人との関わりをまちづくりにつなげて考えていることに共感しました。

やどかりの里が描こうとしている地域と安部さんの活動は「みどり」を切り口にすると重なり合うことが多く、そこに新しい活動が生まれるのではないかと予感させる取材となりました。(記 浅見 典子)

さいたまの匠

地元根づく街の“洗濯屋さん”

川畑 昭二さん
(東洋ランドリー社長)

地元根ざし 55 年の実績

さいたま市南中野の商店街に、1963（昭和 38）年から営業するクリーニング店「東洋ランドリー」があります。2階建ての建物で、南北の道路に面した店舗は、どちらからも気軽に入れます。北側の入り口には、地元の情報誌が綺麗に並べられ、お店の中央は、お客さまからの衣類をお預かりするための長いカウンターがあります。カウンターの奥には、クリーニング済みの多くの衣類が整然とかけられ、その光景は、東洋ランドリーの長年の実績と信頼を物語っているように見えます。

預けた衣類を取りに来た常連の方と、長年勤めている従業員の方々との会話も弾みます。「あれ、わたし洗濯物を持ってなかったかしら?」「持ってなかったわよ」「そうよね……」, 笑顔で会話が繰り広げられます。2階に上がると、お預かりした衣類に丁寧にアイロンがけする川畑昭二さんの姿がありました。

上京、そして、さいたまに

川畑さんは1927（昭和2）年、奄美大島で6人きょうだいの末っ子として生まれます。「昭二」という名前は、川畑さんの長兄が名づけました。

川畑さんが10代の頃、既に東京で暮らしていた長兄を頼り上京。終戦後は食べるものもなく、どんぶりをもって配給所に並ぶ日々だったそうです。ある時、ラジオから流れる奄美の民謡に、思わず涙ぐんだと言います。そして、長兄が営んでいた東洋ランドリーの経営に携わり始めます。当時の従業員は50人ほど。地方から出稼ぎで上京する人たちが住み込みで働いていました。技術を受け継いだ従業員たちはやがて独立し、都内に38軒、店舗が広がっていき

ます。「東洋ランドリーの看板がついているクリーニング店は、うちから独立した人たちだよ」と笑みをこぼす川畑さん。そして、1963年、当時親しくしていた人から現在の店舗を紹介され、以来55年、この埼玉の地で営業を続けています。

川畑さんとやどかりの里のご縁

川畑さんとやどかりの里とのご縁は、およそ半世紀前、やどかりの里の創設者谷中輝雄さんと出会ったことに遡ります。当時、谷中さんがソーシャルワーカーとして勤務していた精神科病院のクリーニング業務を請け負っていたことから、2人の交流が始まります。谷中さんから「職業訓練をしたいから手伝って欲しい」と相談され、その後長年に渡り、やどかりの里のメンバーの職業訓練の機会を提供していただきます。

「やどかりの里ができる前は、障害者のことを警戒する時代だったでしょ。でもそんなことない。メンバーが仕事に自信をもってもらうため、地元を応援しようと思って引き受けたんだよ」。

地元を応援する“洗濯屋さん”

毎年秋、やどかりの里大バザーが開催されます。このバザーには、大宮クリーニング組合の役員の方々始め、青年部や婦人部の方々が必ずボランティアで参加してくださっています。地元で頑張っている団体を応援したいとの思いから、川畑さんの働きかけもあって始まり、今では組合の事業の1つに位置づいています。“地元を応援しよう”との思いを貫く川畑さん、その笑顔からは戦中、戦後を生き抜き、地元を愛し、人に向けるまなざしの温かさを感じ取ることができます。東洋ランドリーは、これからも地元を応援し続ける街の“洗濯屋さん”です。

(記 三石麻友美)



あの街 この街 俊一郎が行く・18

Un perro

密かな願望

こんにちは！ 下町にある古いマンションに住む私には、ある願望があります。それは「犬を飼うこと」です。しかし、悲しいことに私の住むマンションは、犬を飼うことを認めていません。そのため、街ゆく人が散歩する犬を見つめて片時、欲求を満たします。そして、もしその犬がたまたま近づいてきたならば、これ幸いと撫で回してしまいます。

建物見学の帰り道

建築を見に訪れたヨーロッパ。憧れの建物を間近に見ることができた高揚感で、脳みそが痺れるような感覚を感じながら、宿へと向かいました。ふと、フーフーと荒い息遣いに気が付いて振り返ると、ボールを啜えた犬が私を追いかけてきて、立ち止まった私にボールをポトンと落として見つめるのです。見回しても飼い主らしき人はいないので、喜び勇んでよだれで濡れたボールを控えめに投げるものの、濡れたボールは手の中で滑り、やや見当違いの方向に向かいました。人馴れしたその犬は、ゆっくりとボールを啜えて、再度私の足元にボールを置きにきます。2, 3回繰り返すと、礼を言いながら飼い主がやってきました。礼を言いたいのはこちらのほうですが、気の利いたとも言えずに至福の時間は終わりました。



とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）を複数行う。（写真 新 良太）



「アンダルシアの犬」

アンダルシアとはスペインの地方の名前です。この旅行に行くことになった時に、なぜか思い浮かんだのが画家のダリが関わったこの映画のタイトルでした。衝撃的な映像が出てくることに怖気付き、映画を見たことはないけれど、タイトルだけは常に気になっていました。そしてスペイン=犬という変な刷り込みが起こったのです。実際に訪れたスペインでは、perro（ペロ）=犬を連れて来た人を多く見かけ、犬たちは常に飼い主の横に寄り添いながら、しかし堂々と街中を闊歩かつぽしていました。

ヨーロッパの都市部は、ほとんどの人がマンションのような建物に住んでいます。街中で見かけた犬は大型犬が多かったですが、マンションで同居することもできそうな分別のある犬たちが羨ましかった。そして、社会が決めたルールの中で、人々は犬と共存していました。

帰国して

旅行から帰ると、1週間後にはマンションの定期総会。持ち回りで、今期の理事長を務めているその総会の席で、かねてから準備していたペット規約の設置を提案し、ペットを飼えるようにルール変更しようと考えていました。

帰国の途上、スペインで見かけた犬たちの姿と、ともに誇らしげな飼い主たちの姿を思い出し、熟慮したつもりのペット規約でしたが、読み返してみようと思いました。



埼玉スタジアム 2002 公園除草作業

働く喜びを実感して

埼玉スタジアム 2002 公園の除草作業開始！

30haもある広大な「埼玉スタジアム 2002 公園」。園内にはJリーグの浦和レッズのホームスタジアム、「埼玉スタジアム 2002」があり、そのスタジアムの外周部分の除草作業を県内の障害のある人たちが担っています。

埼玉スタジアム 2002 の所長さんが以前埼玉県庁の障害福祉の担当課にいたご縁で、「障害のある人たちの仕事にできる」と、埼玉県セルフセンター協議会にお声がかかりました。2017（平成 29）年 7 月からやどかり情報館を含む 4 つの事業所で除草作業を始めました。働く人の障害はさまざまですが、精一杯、お互いに協力しながら働いています。

実直に働くメンバー

始めた頃は、慣れない仕事への不安や体力の心配があり、職員がいっしょで

したが、今はメンバー 4 名で取り組んでいます。到着すると担当の人へ挨拶し作業場所の指示を受けます。始めは緊張していたやり取りも今は自然にできています。作業道具を用意し、その日の作業範囲をどこからどう行うか 4 人で打ち合わせます。雑草は手除草で、



やどかり情報館は、さいたま市見沼区で精神障害のある人たちの「働くこと」を支援している事業所です。30人を超えるメンバーが出版、印刷、ピアサポート事業、農業、協働ネットワーク事業など多様な仕事に就いています。今回は埼玉スタジアム 2002 公園の除草作業に従事する人たちを紹介します。

落ち葉などは竹ぼうきで掃いていきます。時間がくるとスタジアムの担当者に進捗を報告し終了です。4人の実直な仕事ぶりは信頼を得ているようです。この過程を週 1 回 2 時間行っています。事業所によっては週 4 回のところもあります。この仕事に従事する人たちは、



は、「裏方の仕事だけど、自分たちがプロの戦うスタジアムをきれいにしている」という自負心をもち、暑い日も寒い日も雨の日も働いています。

障害のある人たちが担える仕事ももっとある

やどかり情報館は、雇用契約を結び働きたいという希望者が多く、出版や印刷の仕事を中心に仕事の幅を広げてきました。埼玉スタジアム 2002 の公園除草の仕事もその 1 つです。「ずっと机に座りパソコンを見る仕事なので、週 1 回くらいは外に出て体を使う仕事があるのはいい」と話す人もいます。街の中には、障害のある人が担える仕事がたくさんあります。「こんなことはできるかな」と思ったらぜひお声かけ下さい。多くの人たちが「働く喜び」を実感できる仕事との出会いを待っています。

（記 木村 千夏）

今の自分を生きていく

齋藤 和宏さん

(やどかり情報館)

やどかり情報館で働くまで

さいたま市見沼区にあるやどかり情報館(障害のある人が働く事業所)で働く齋藤和宏さん。働き始めて1年8か月が経ちました。今では経理事務やテープ起こし、原稿校正、出版の営業活動、そして埼玉スタジアムの除草作業など、さまざまな業務を担っています。やどかり情報館にたどり着くまで、そして現在の働きぶりをお聞きしました。

「私は割合大きな商社の子会社で、長く経理の仕事をしていました。しかし、40代前後で仕事のストレスからうつ状態に。それを何とかしようとお酒に走り、アルコール依存症になりました。仕事が続けられず退職し、その後は老人ホームで働いたり、マンションの清掃員、製麺所でのライン作業など、人間関係の躓きから職を転々としてきました」

人と穏やかに関わり、時折ジョークを交えて話す今の齋藤さんからは想像できませんが、当時は周りの人

とのコミュニケーションが難しかったのだそうです。

そうした折、クリニックの紹介で出会ったのがやどかり情報館でした。

病気を隠さないでいい

「情報館に来ていちばん大きかったのは、病気を隠さないでいいということ。これまでの職場で、自分の病気について話したことはありませんでした。病気への偏見は強いだろうと思ったからです。ただ、情報館は障害のある人が働く場なので、そこに気を使う必要はない、ひょっとしたらうまくいくかもしれない……と働いてみました。私もそうですが、人間関係でつらい思いをしてきた人たちだと思うので、誰かをバッシングするような人もおらず、リラックスして働くことができます」

チームプレーで得る達成感

昨年(2017年)7月から、情報

館では埼玉スタジアムの除草作業を請け負っています(詳細は本紙「あなたの街のやどかりさん」参照)。齋藤さんもその業務を担う1人です。

「1日中パソコンのディスプレイを眺めて仕事をしているより、週に1回ぐらい外の空気が吸えるのはいいかなという気がしました」と齋藤さん。現在は毎週火曜日、4人のメンバーで除草作業を行っています。

「週に1回、きっちり2時間作業して終わる、そういう仕事ができているのはとてもやりがいがあります。私は人の中は好きではなかったし、いじめられたりするような人間だったけれども、合同での仕事は別に嫌いではないんです。埼玉スタジアムの仕事は完全にチームプレーなので、みんなで協働して取り組むことの達成感もありますね。先方の担当者もとても素敵な方なので、いい関係性を築きながら、落ち度のない仕事を目指したいと思います。体も慣れてきたので、できればこの仕事を長く続けていかれたらいいですね」

自分の生き方を探して

そんな齋藤さんは、ここ数年で価値観が大きく変化してきたそうで

す。

「病気をもっている自分を受け入れることで、すべて自分で抱え込まなくてもいいのだと気づきました。何かマイナスな部分があっても、他の人の協力を得て補ってあげればいいのかも。そう考えると楽になりました。職場環境はもちろん、アルコール依存症の自助グループで出会った人たちの存在から、そう思えるようになったんです。

私は今までやってきたことが1回だめになってしまったので、もう一度同じことはできない、だったら違う生き方をしていくしかないのかなと気づきました。今までの生き方も、『中学を出たら高校へ進学、大学へ行ったらいい点数を取っていい会社に入る』……そんな世の中の正常とされているものでした。それが自分のほんとうにやりたかったことかというところでもない。だから今は、ほんとうに自分のやりたいこと、生き方を探している途中です」

過去に人との関係に躓きながら、今ではその人との関係に癒され、働きがいを感じている齋藤さん。私がいっしょに働く中で感じている頼もしさは、これまでの齋藤さんの歩みに裏打ちされたものなのだと実感します。(記 萩崎 千鶴)

布ぞうりをつくるため

ご不要の「ゆかた」大募集！！



- ◆店舗持ち込み歓迎！集荷応相談
- ◆年代・柄・色 問いません
- ◆しみ・汚れありでも OK!!
- ◆大人用・子ども用、性別 問いません
- ◆浴衣地反物でも OK!!

＜問い合わせ・持ち込み先＞
 すてあーず（公益社団法人やどかりの里）
 〒337-0042 さいたま市見沼区南中野 844-22
 （JA 片柳支店隣り）

TEL 048-688-8223

ご不要となった浴衣がありましたら、是非すてあーずへご寄付ください。

【エンジュ】配達パートさん大募集！

高齢者向け弁当宅配の配達パートさんを募集しています。軽自動車でご自宅または事業所に弁当をお届けする仕事です（さいたま市内）
 曜日：月～金（祝日をのぞく）時給：880円～
 時間（昼食配達）11:00～12:30
 （夕食配達）15:30～17:30



【お問合わせ】

686-7875（永瀬）（月～金・祝日を除く、8:30～17:30 受付）
 〒337-0042 さいたま市見沼区南中野 286-1

こころの悩み、ちょっと話してみませんか…？

お住まいの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい

見沼区障害者生活支援センターやどかり 電話；048-682-1101
 大宮区障害者生活支援センターやどかり 電話；048-795-4720
 浦和区障害者生活支援センターやどかり 電話；048-793-6373

～精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です～

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
 こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



いちず
 とうふ屋 一豆

TEL 048-854-8000
 FAX 048-854-3538
 さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりこだわった本格とうふ。宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。

きりしきのパン

TEL 048-854-6910
 FAX 048-854-6942

さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。（一部商品を除く）
 この道30年の職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。
 野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいると女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

○鴻沼福祉会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて新しい仕事にもチャレンジしつつあります。

○障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています！ 問い合わせ先：048-854-6890（担当オガワ）

鴻沼福祉会事業所一覧

- 本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL：048-854-6890 FAX：048-856-0313
- 《はたらく》●つばさ共同作業所（中央区） ●あざみ共同作業所（見沼区） ●そめや共同作業所（見沼区） ●きりしき共同作業所（中央区）
 ●さいたま障害者労働センター（桶川市）
- 《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ
 ●なつめホーム（以上、中央区） ●のぞみホーム（見沼区）
- 《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢（以上、中央区）
 ●見沼区障害者生活支援センター来入（見沼区）

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／写真家。東日本大震災を機に「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花 Flowers of Fukushima」シリーズを制作。全国各地での写真展開催のほか、病院や福祉施設などでの展示も手掛ける。野口勝宏オフィシャルサイト

<http://noguchi.photo>

表紙：サクラ

福島の私の周りでは、待ちわびた桜がやっと満開の時期を迎えました。厳しい冬の間は鋭い目つきだったヒヨドリも、春の陽気で浮かれつつ多忙を極めています。桜の蜜を吸っているのか、落としているのかわからないほど大雑把な動作で飛び回り、くちばしは黄色い花粉で粉をふいています。桜は、咲き始めると同時にすでにさびしさを伴う花です。開花の途中で気温が下がる日があると、延命できたようで嬉しいぐらいです。けれど散り際に感じたせつなさもつかの間、葉桜の頃にはすでに心は初夏にとんでいき、待ちわびた春のことなどすっかり忘れてしまうのでした。

大宮見沼よみさんぽ 第24号

発行 2018年3月

編集 「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

題字 宗野文さん

学生時代から書道が大好きで、子育て中の今、我が子とともに習字に再挑戦中。やどかりの里の作業所「すてあーず」所長。見沼区南中丸在住。

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

「大宮見沼よみさんぽ」編集委員一同